(22)大政紀要第五十七卷三二—三四頁
(23)McLaren, op. cit., pp. 183, 184.
(24)明治政史(第六册)一四七六頁
(25)東洋經濟新報社編明治金融史一四一—一四三頁
(26)明治政史(第七册)一六七五—一六八九頁參照
(27)同書一六一〇頁
(28)同書(第八册)一八〇四頁
(29)同書一七八八—一七八九頁
(30)文學博士芳賀矢一著國文學史概論二三〇、二三六—二四二頁
(31)明治金融史一八頁

# 雜纂

## 元政壁書といふ文の事

文學博士　藤井乙男

世に深草の元政上人壁書といひ傳ふるものありその文は左の如し。

不幸にして世をそむける墨の衣にはあらで、髮ゆふがむつかしさに頭を剃り、柴の軒竹の柱身に(をカ)輕う此に留おく心から、世の人を見るに只身を思ふ業のみに足を空にし、吉野山のはなのあはれもしらず、深草の鶉の聲を聞ては燒てしてやりたいと計おもひ、後は何になる事ぞや、斯く靜ならぬ身は只人間のみにあらず、山を出る雲は雨を催さんが爲に

闌し、山の鹿は妻乞世話に聲の限り鳴く、是を思ふに此身程樂に際な事はなし、惠心の作の佛一體持たれど、後世願ふ爲にはあらず、持傳へたる道具なれば御宿申計也、膝を入るの二枚敷、土鍋ひとつに埒あき、正月とも思はず、雜煮くはぬ身には聞かれまいとも言はぬ鶯の初音心よく聞、夜着蒲團持たぬ家には見られまいともいはぬ依怙ひゝきのない窓の月をながめ、嵐吹く夜のさよしぐれ、降らうが降るまいが我身ひとりの苦にもならず、春の色（笆カ）のこぼれ種の夕顏、曲らうが筋かうが、あんな物ぢやと思ひ、睡る筈の目なればぬぶたければ畫もかきこもり、歩く筈の足なれば、手の奴足の乘物、心の欲する所にあるけども、盗せぬ身なれば人も咎めず、極樂へ行て樂しみたいと思ふ慾なければ、地獄へ墜る恐れもなし、死するまで生ふと思へば、年の寄るをもへちまとも思はず、年をかぞへた事なければ、いくつになるやらしらず、覺えた事なければ忘れた事なし、

あららくや人が人ともおもはねば人を人とも思はざりけり

松立てずしめかざりせず餅搗かずかゝる家にも春は來にけり

右は國學者傳記集成僧元政の條に、笈埃隨筆八を引用せしものに據る。京都帝國大學圖書館所藏の笈埃隨筆には此一章なし、また坊間往々元政自筆と稱するこの壁書を見ることあり、その文互に多少の異同出入あれども、まづ同一物と見做すべきものなり。

さてこの文の滑稽洒落なる、到底謹厚篤信なる上人の筆とは認容さるべくもあらず、されば前輩も既に種々の人物を拉し來りて其作者に擬せり。伴蒿蹊は續近世畸人傳卷三霞谷山人の傳後に附記

して曰く、「世に元政壁書といふものあり、假名にざれことのやうに書て、老莊のかたつかたを心得しと思はるゝものなり、元政上人において沒交渉假寢の夢にも上人を知らぬものゝいひふらしたるなるべし、其中に髮結ふがむつかしさに髮おろしたりといふことあり、又惠心の作のあみだ一體もちたれども、後世をねがふためにもあらず、おやど申計之とあり、上人は出家以來持律戒愼の人なり、又日蓮宗なり、趣一向にたがへることは、眼識なき人といへどもしるべし、又ふかくさの鶉の聲を聞て、燒てしてやりたしとおもふ意もなしといへるはいかにぞ、鶉狩などいひて、殺生のために出る人は各別にて、およその人、鳥けだものゝ形聲を見聞て、食欲の念起るといふことは稀なるべし、深草のうづらといふより、やがて燒とりに意のつくは、あさましともあまりあり、是はもし生々(なまなま)の物識がはなる俳諧師などの、此里に住て書たる事やあらん、もし佐川田昌俊の作にやと花頭は疑ひしかども、是もあたらず、或は霞谷山人こゝに住て、風顚の趣頗似たりといふべけれど、戒定慧の說をみれば大きに非之、畢竟しられぬことながら、霞谷の名に付てこゝに評して上人のために寃を淸む」といへり。霞谷山人は深草の霞谷に樓みし隱者にて、「常の言に、法界は吾心之、心は吾法界なり、法界と心と初より二つなし、戒は吾宅之、定は吾衣なり、慧は吾食なり、これを法界に遊ぶといふと、」同書に見えて、末に元政の讃を揭げたれば、同時代の人と思はる。

太田南畝はその一話一言二十八に、吳竹かな文と題して、

伏見に侍りし吳竹一生の境界

吳竹の伏見の里に世話(捨カ)人のありしが、哀我身ほど隙なる者はあらじ、惠心の無量佛一體、是あながちに念佛の爲にもあらず、持

つたへし道具なれば御宿申迄也、上品蓮臺に生じて樂みたいと思ふ欲がなければ、地獄に落るくるしみもなし、死迄は生るであらう、（と脫カ）思へば春秋の暮るゝ日をも壹錢とも思はず、寢る爲の日（目カ）なれば晝は（もカ）枕し、ありく爲の足なれば夜ひとへ（よカ）たゝきあるけども、盜ぬから人に咎められず、まがきの朝顏がゆがまうとすじこふと勝手次第之、あんな物と思へば朝日にしぼめるも驚かず、薄のひらしやらするも其通にて、小夜時雨降らうとふるまいと、われひとりの苦みにもならず、雜煮くはぬ者にきかせまいと、鶯啼次第也、錢もたず人に交らぬ故、えこひいきなし、差入る月に膝を入る二疊敷にすんで、食櫃もたず、萬を土釜一つにて埒明け、覺た事なければ忘れた事もなし、年も數へざれば四十やら五十やら



老が身も定めて人のうみつらん父母計り見へたあめつち

「覃云、世に所傳深草元政壁書といふもの此文をあやまり傳へたる歟」と無造作に評し去りて、その出所も吳竹なる者の何人なるかをも言はず、思ふに誰かの隨筆雜錄類の中よりふと見出せるまゝ抄錄せしにもあらんか。南畝蒿蹊まだ笈埃隨筆の著者塘雨等の天明寛政頃は專ら此文を元政壁書と世に言ひ觸らしゝものと見ゆ、元祿寶永の頃には未ださる傳說はなかりしものゝ如し。然るに甕庭篁村氏は月尋堂の作今樣二十四孝の中より此文を發見して、雜誌國民之友に揭げ、（後同氏の文集雀躍に收む）此著者の筆は決して他人の文を取りて我作の中に混ずる如き卑劣なるものにあらず、一篇全解の文に混融して剽竊の痕なし、斷じて此壁書と稱するものは月尋堂の作なりとすべしといはれたりき。月尋堂はその傳記詳かならず、北京散

人の別號あり、京都の俳人にて寶永五六年の頃五六種の小説を出せり、二十四孝は寶永六年六月の刊行にて、その文は卷六「名はいはじ親は長劍(ながたな)」の條の發端にいづ

山城國伏見の里に秋山といへる人の、昔は備後の福山に仕へし身なりしが、世をやかましい物に思ひとり、不幸にそむるすみの袂にはあらで、髮結ふがむつかしさに頭を剃り、竹のたるきかやがのき、かるふ身を爰に取をき浮世をのぞけば、ひがしにしに行て歸る人みな善惡の辻を股にかけて、惡性に銀ほしいと欲面ひつぱる眼には、木幡の花の哀もしらず、深草のうづらもやいてしてやりたいと、耳からも鼻からも算盤をはぢきて、めつたやたらにもうけたがるは、後に何うする事ぞや其しづかならぬ事は、人倫のみにもあらず、おのへを出る雲は雨を催さんとていそがしう走る氣色、おかべの牡鹿は妻をこふ思ひを、聲のかぎりにはこびつくす、かへり見れば此身程ひまな者はあらず、惠心の作の無量佛一體、是必ず念佛の爲にあらず、先祖より持ち傳へし道具なれば、是非なく御宿申ばかりなり、未來上ぼん上しやうの蓮臺に座して、樂しみたいと思ふ欲なければ、地獄に落る筈もなし、死ぬる迄生てゐるであらうと思へば春秋のくるゝをも二文とも存せず、籬にこぼれ種の朝顏、ゆがまうがすぢろうが勝手次第なり、あんな物と思へば、日蔭にしぼむをけしからず驚かず、薄もほに出てびらりしやらりめさるゝは、いらぬ御世話の小夜時雨、降ろとふるまいと我一人の苦にももたず、寢る筈の目なれば晝も蚊帳にまくらし、歩く爲の足なれば、夜一夜あるけど、盜みせぬからは人に不審もうたれず、膝いるゝ二枚じきに糯米

瓶もめしつぎももたず、萬事を一の土釜に埒をあけて、雜煮喰はぬ者にはきかれまいともいはぬ鶯を樂み、夜着持たぬ家とてるこひいきせずに窓もる月に打向ひ、覺へた事なければ忘れた事なし、年も數へた事なければ、三十やら四十やらしらず、かゝる道人末の世にはたぐひも非ず（下略）

かくて此無量佛が證據となりて實母にめぐりあふ一篇の因緣話を成せり。篁村氏の激賞せる如く、二十四孝の文は前數者に勝りて文意も能く通ずれど、全篇混融して剽窃の痕なしとは稍々斷言し難きに似たり、これ必ずしも余が成心ありて迎へ見る爲ならざることは、國書刊行會本について原文を熟讀せられなば何人も龍頭蛇尾の感なき能はざるべし。いでや月尋堂の二十四孝以前に既に此文世にありしを示さん、元祿十六年正月出版の好色敗毒散卷三「世をすて人」の一章を見よ、文章內容



共に月尋堂にまさること數等、且これこそ前後相應して木に竹をつぎたるが如き痕なく、渾然たる一篇の才筆ならずや。

命あれば食あり、食して空居る者もなく、相應のたのしみもとめて、心をやる事さまゞなり、さりながら無性に銀ほしいといふ念さへなければ、苦をしらぬ故、別に樂みをこしらへねども、山川鳥獸みな心の友としなぐさむわざなり、爰に有無庵といふ隱逸あり、俗性いやしからず、壯年の時土州高知に仕官の身なりしが、世をやかましいものに思ひとり不幸に染むる墨のたもとにはあらで、髮ゆふがむつかしさに天窓をそり、和州當麻山のふもとに竹の椽に茅が軒端、惠心が作の無量壽佛一體、是もあながち念佛のためにもあらず先祖より持つたへし道具だとおもふばかりに安置し、紙のふすまに茶瓶ひとつ、是より外

には糊粧瓶さへなくて、膝をいるゝ計を、安じやすき庵と得心し、ねぶたければ晝もねる目がさめたれば夜も寢ず、手の奴つかへば不奉公もせず、足の駕にはこあげをやとふ世波もなし、雜煮いはゝねど春くればこそ花も咲け涼しさにあふぎとらねども夏は夏なり、外面の草の露けきは秋にやなるらん、笆に菊のこぼれだね、をのれとひらく色をよろこび、悠然として葛城山をながめ、首をめぐらせば二上山の白雲無心にして岫をいづるも、我身にくらぶればいそがしさうにおもはれ、人音せねば晝さへ虫のこゝらなく草のむら〳〵、花薄の何おもひ入てまねくらん、いらぬ御世波の小夜時雨、ふろとふるまいとかまはぬ事也歌よまねば詩もつくらず、おぼえたる事なければ、わすれる事もなし、未來は上品蓮臺に座して、樂をしたいとおもふ欲もなければ、



地ごくにおつるはづもなし、しぬるまでは生て居るであらうとおもふばかりなかりしが、ある時在世の人倫戀にしのぶの色里一見せばやとおもふ一念おこりければ、誰にへつらいもなく、十寸穂のすゝき後といはずに、難波の新町に夜見せの灯あぐるほどに行着、心まかせに見めぐりしが、俗のとき目かけたる川口屋が門に立とまりて樣子を見るに、むかしにかはる繁昌、揚屋はいづれもかくぞあるべくひとりごちて感ずる所に、かぎりの太皷きこゆれど、かへるべき庵もとをし、今宵は爰にあかさばやと、端の住吉屋が軒の下に袖をかたしきまどろみけるが、寅の刻ばかりにやあるらん、枕もとに人おとあまたしければ、首もたげて見るに、白髮の翁水ころもに花色の尉斗目舞扇もちて、いかさま中入まへの大夫出立、金春八郎がたち姿にもおさ〳〵おと

るまじく見ゆ、此外はみな人間のかたちにあらぬもの一めんになみゐて、翁が下知をうくるけしき、不思議といふもおろかなり、されども有無庵物におどろかぬ性念なれば、かの翁に向ひて、そも此ありさまは何と申す事にや侍るらん、まづ御身は何人ぞとたづねしに翁完爾と打ゑみて、御坊の不審尤なり、夫物おほく集る所には其氣かたちをむすびて精靈あり、今こゝにあらはれたるもの、此廓にてとりあつかふものゝ精なり、御身寄代の悟道人なれば結緣のために一々かたりきかせ申すべし、まづかく申それがしは、いにしへ秦の始皇の御代より千とせをへたる松の精なり、そのゆへは此里にて高位のよねを大夫といひ松といふことのはのちりつもりて、かやうに形をあらはすぞや、又あれなる大入道の目も鼻もなく、只眞白に雪のやうなるは、此里に



てつかひすつる延紙の精也、又禿の口ばかりありてその色眞赤なるは、紅猪口の精、またそのかたち盥のごとくにて手ばかりうごき、そのくろさ烏のごとくなるは鉄醬の精、また裾のちぎれたる花色のときわけ着たるは揉莖の精、またその色何とも見わけがたく、そのかたちぬらりひよんとして、たとへば鯰の目口もないやうなるもの、あれこそ迂許の精なれ、其外酒の精、吸物の精、伽羅の精、やきものゝ精、平髻の精、描の精、下紐の精、茶漬の精、おかしきかたちのかぎりなり、又はるかあなたに丁銀十貫目入の箱二百ばかり中勘にも二千貫目とはたしかに見ゆるは、此里の繁昌につき分限者の精かとたづぬれば、翁のいはく、いや〳〵それは了簡ちがひ、あれは總女郎たちの借錢の精なりとをしへぬ。廓名物の精靈を見ること、かゝる洒落の道心者に

ふさはしく、どこまでも浮世を茶かしたる筆勢、殆ど西鶴の壘を摩すといひつべし、六年以前にかくの如き名文世に現れある以上、月尋堂は到底剽竊の汚名を免れがたかるべし。人或はいはん、此文の彼に先だち且彼よりも妙なることは異論なし但これも亦何等か據る所あるにあらざるか、曰くさる事も絶無とは斷じがたし、されど余の鑑識を以てすれば所謂壁書なるものは寛文以前のものに非ずして西鶴一派の俳諧的新文體の勃興以後の作と認めらるれば、敗毒散の著者を以てその原作者となさんこと不可なきに近し、それが世に愛誦せられ一篇獨立の文となさんが爲に、好事の徒によつて屢々添削改竄せられ、漸次拙劣蕪雜に陷りたるなるべし。（大正九年二月十日稿了）

# 茶山片影

文學士　西田直二郎

龜井鵬齋、一日、市亭に飲みて歸るとき、街上雜沓の間に一老翁の芝宇清秀のものを見て、呼びて曰く、翁は西備の菅君にあらずやと、翁曰く是なりと、因て其名を告げ、遂に其手を援て、復市樓に登つて、素懷を抒べ醉を盡して別れたと云ふ話がある。この事を谷文晁が、茶山鵬齋日本橋邂逅圖として畫き、伊勢の河崎敬軒に與へた。敬軒は復、鵬齋に畫上の題詩を求めた。鵬齋、賦して「身是關東醉學生、公是西備茶山翁、日本橋上笑相見、共指天外芙蓉峰、都下閑傳爲奇事、便入寫